



六日目追加 HO マリー









スミレに痣を見られてしまった。

私は魔女になるために生まれてきたのに、彼に知られて動揺していた。

その動揺から逃げるように、上掛けを頭からかぶる。 どのみち、明日にはスミレに話さなければいけなかったの だ。

それが早まっただけ、そう思い直して、目を閉じた。

夢を見た。

真っ暗な空間の中、一人で走っている夢。 なにかに追われているような感覚があって。 暗い、こわい、おそろしい。 逃げたい、逃げたい。 息が詰まりそうだった。

足を止めたら暗闇にのまれてしまいそうで、止められない。このままずっと独りで走り続けないといけないのだろうか。そう思ったときだった。

「マリー」

私の名前を呼ぶ小さな小さな光が見える。 そこに向かって走り続けて――光に触れたとき、目を覚ま した。

まだ日が昇る前のようだ。



ロフトの小さな窓から外を見ると、スミレがまだ作業をしている。

あの声は……?

昨日の夢ではしっかり聞こえたのに、今日の夢では霞がかったような声だった。

なぜだかスミレの背中から目が離せない。

けれど、彼が急にこちらを向いて、びっくりして身を潜めた。

気づかれてないかな。

それからはやる心臓を抑えて、少女の日記を開いた。

『六日目。今日も夢見が悪かった。魔力が体になじんでいる影響なのだろうか、なぜだか、こわくて逃げ出したい気持ちになる。かつての少女たちが感じた気持ちなのかもしれない』

五日目とは打って変わって、きれいな字で書かれている。 私も夢の中で、こわくて逃げ出したい気持ちになっていた ことを思い出す。

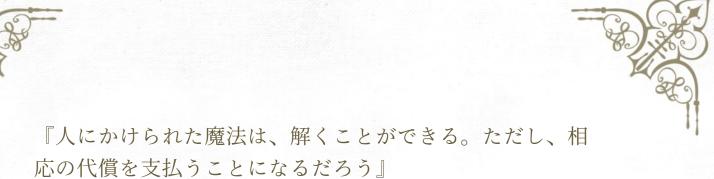
少女の日記は、六日目で終わっていた。

私は魔法を解くための本がないか、読書を再開した。次から次へと本を積み、やっと、その本に出会えた。

薄くて小さな本にはただ、こう書いてあった。







やっぱり魔法は解くことができる――、けれど、相応の代償とは一体どんなものだろうか。

ページをめくってもあとは白紙で、それ以上の情報はなかった。

魔女になれば魔法を授かり、長い時を生きることになる。 そして、スミレの魔法も解くことができる。 けれども、それには代償を支払う必要があるようだ。 それもどんなものかはわからない。

本来なら一人で過ごすはずのこの小屋に、スミレがいてくれてよかったと思う。

土砂崩れが起きた夜も、そのあとも、助けてもらってばかりだった。

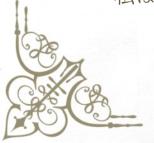
今日見た夢だって、スミレのおかげで光を見つけられたのかもしれない。

そうでなければ、私はずっと独りで走り続けていただろう。

今日は私が小屋にやってきて七日目。

昼には司祭がやってきて魔女になるための儀式がはじまる はずだ。

このまま儀式を受けるか、逃げてしまうか。 私は――。







選択肢

1.魔女になる 2.魔女にならない

シーンを進めるとココフォリア上に選択肢が表示されるので、 自身の選択を左クリックしてください。



